

【取扱い厳重注意】

平成23年9月21日

聴取結果書

東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会事務局
局員 三田 浩平

平成23年9月20日、東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証のため、関係者から聴取した結果は、下記のとおりである。

記

第1 被聴取者、聴取日時、聴取場所、聴取者等

1 被聴取者

経済産業省原子力安全・保安院次長 平岡 英治

2 聴取日時

平成23年9月20日午後3時00分から同日午後7時20分まで

3 聴取場所

福島県文化センター1階応接室

4 聴取者

飯崎補佐、三田主査

※ 複数人で聴取したときは、全員の氏名を記載する。

5 ICレコーダーによる録音の有無等

あり

なし（理由：（「対象者の希望による。」など簡潔に記載））

第2 聴取内容

避難措置について
別紙のとおり

第3 特記事項

なし

以上

【取扱い厳重注意】

別紙

1. 官邸5階における記者会見に係る議論等

ERSSによる2号機の事象進展予測について記憶が確かではないが、3月11日夜に私が官邸5階にいるところに内藤君が持ってきてくれたと思う。これも記憶が定かではないが、海江田大臣や枝野官房長官、班目委員長には当該事象進展予測の紙について説明していると思う。当該事象進展予測は全く注水されなかった場合の進展予測であり、常識的な進展予測である。官邸5階においても3月11日未明には燃料頂部が露出してから約2時間程度経つと炉心が損傷するとの共通認識はできていた。当然、政治家から「注水がなされなければその後どうなる」との質問をされたので、東電も炉心の露出から約2時間程度経つと炉心損傷に至る旨説明していた。

官邸5階において、東電は異常事態連絡様式に添付されている注水状況や原子炉圧力、水位等を示した表を用いてプラントの現状を説明していた。私から見て東電の説明は、特に何か現状を隠すといったことはなかったと思うが、情報の収集に苦慮している様子であった。

3月11日午後10時の官房長官記者会見について、私はその記者会見に陪席していた。当該官房長官記者会見のプレス文については、総理執務室の奥にさらにおそらく補佐官の控え部屋だと思われる小さい部屋があり、その部屋に記者会見の前に私と内藤補佐が呼ばれ、枝野官房長官、福山副官房長官、細野補佐官、寺田補佐官がその場において、枝野官房長官が私共に質問しながら記者発表文案を考えていた。

私は、「福島第一1～3号機の今後の進展について」の資料は3月12日に見ているが、実際に誰かに手交したり、説明したりしたかどうか全く覚えていない。

私は、1号機ドライウェルの圧力がとにかく高かったので、3月11日から3月12日の未明にかけては、1号機のベントに意識が集中していたが、どんどん圧力が上がっているのにもかかわらず、水位がまだある程度あったので、水位計についてはこの頃から疑いを持っていた。

避難距離を3kmから10kmに拡大した理由の一つとして、溶融した炉心が炉水に触れた後にベントを行うと、ベントの時に拡散する放射性物質の量が多くなってしまうため、1号機のベントが遅れている上に水位計が信頼できないという状況を鑑みたことがあると思う。

炉心が露出しているとの疑いが大きくなる中で、当然被覆管も溶融しているとの疑いがあったので、被覆管が水と反応するいわゆる水ジルカロイ反応がおこり水素が発生するであろうということは、官邸5階でも共有されていた認識であった。総理が「水素は大丈夫か」と班目委員長へ質問したところ、「格納容器には窒素が満たされているので、格納容器が健全であれば大丈夫」と回答していた。班目委員長は、水素が建屋に漏れ出て充満するとの考えはそのときはなかったようだが、その後、1号機爆発の情報を聞いたときに、班目委員長はとっさに「建屋の水素爆発の可能性はある」旨の発言をしていたので、班目委員長は事象として起こり得るということは分かっていたのではないかと。総理は、班目委員長が水素爆発はしない旨の話をしていたのにも関わらず、実際には爆発が起きたので、1号機爆発後、総理は、班目委員長を信頼しなくなったようだった。

3月12日のその1号機爆発前、東電や保安院の記者会見に関する情報は官邸5階に

【取扱い厳重注意】

ほとんど入ってこなかった。

保安院の記者会見については、正確な時期は覚えていないが、確か水素爆発後のどこかの時点で、官邸の了解を取ってから記者会見をすることになった。そのきっかけは、私の記憶では、官邸5階において、保安院の記者会見がどのように実施されているかが話題になったときのことであり、私は、保安院は何かあったら記者会見するのではなく、定例で記者会見を行っている旨の説明をしたと思う。しかし、議論の結果、データをきちんと発表するのも大事だが、発表について官邸が何も知らないというのは適切ではないという理由により、発表する前に官邸の了解を得ることになった。(被聴取者に対し、[] 及び [] から、誰かが保安院記者会見に関することで激高していたとの証言があった旨の説明をしたところ、) 誰かが保安院記者会見について叫んでいたことがあったことは覚えているが、それが誰であったかは覚えていない。政治家サイドでは中村審議官の炉心溶融発言について非常に問題視していたが、溶融でも損傷でも、事故の対処としては何も変わらないのに、何故そこまで騒いでいるのか私は分からなかった。海江田大臣は、保安院が定期的に記者会見するべき旨の意見を言っていたのに対し、誰か他の方(細野補佐官ではなかった。)が、きちんと官邸が統制を取って記者会見するべきとの意見を言っていた。いずれにせよ、その議論の結論としては記者会見前にきちんと官邸クリアをとることになり、そのことを私からも電話で保安院に伝えていたと思うが、誰に電話したかは記憶がない。

了解をとる相手は、海江田大臣と細野補佐官であったと思う。最初のうちは丁寧にやらねばならなかったので、記者会見の案文や発表のポイント、クロノロジーなどを用意して説明しており、保安院側の資料セットに時間がかかっていたこともあったが、大臣等も大変忙しく、了解を取るには非常に時間がかかった。記者会見の頻度が落ちたが、決定事項であったのでやむを得なかった。最初のうちは、保安院本院から職員が官邸に来て記者会見案について説明していたが、13日に安井部長が来た時に、記者会見の了解は秘書官にやらしてもらおうとの提案があり、それ以降は保安院から秘書官へ記者会見案を送付し、秘書官から海江田大臣と細野補佐官に了解を取ってもらうようにした。

なお、[] 3月13日午前4時頃、根井審議官が官邸5階に来て、総理や枝野官房長官等大勢の政治家の方々と議論をして、最後に、根井審議官が「自分が直接記者へプレスする」と啖呵を切っていたことがあった。これを契機にそれまで野口統括が担当していたプレスを根井審議官が担当したように記憶している。

2 3月11日から15日のモニタリング結果について

私は詳細をよく知らないのだが、5月の連休明けくらいに、現地オフサイトセンターのモニタリング結果の中で未公表の資料について整理して公表しなければならないとの話があり、私は総括班から、公表に向けて放射線班においてごちゃごちゃになっていた資料を整理している旨の話聞いた。ERCも現地オフサイトセンターも、未公表の資料があり、公表しなければならない旨の認識はもっと前からあったようだ。

私は、現地オフサイトセンターの総括班長と放射線班長にきちんと整理するよう指示を出し、文部科学省がモニタリングの公表を担当するようになった3月16日より前のモニタリングデータを表に整理させた。

【取扱い嚴重注意】

5月下旬頃に、現地オフサイトセンターの総括班から保安院本院企画調整課に整理した表のデータを送った上で、企画調整課と相談の上、大熊町のオフサイトセンター建物の中にもデータが残っていないか確認することとなり、当時福島に移転していたオフサイトセンター職員数名が、5月28日、大熊町オフサイトセンター建物に行き、そこに残っていたモニタリングデータを公表した。

3月11日から15日までのモニタリングデータについて、資料の整理もされずに5月上旬までデータが埋もれていたのは、保安院内で連絡の行き違いや誰かが失念していた等の問題があったと認識している。問題の一つとしては、現地オフサイトセンターのメンバーは入れ替わりが多かったため、しっかりと公表へ向けた作業を始める人間がいなかったことがあったと思う。

以 上